

平成25(2013)年9月21(土)~22日(日)

# 第54回南米仏教婦人会大会基調講演

大会テーマ みほとけとともに

講題「妙好人に導かれて」

Ver.16

浄土真宗本願寺派布教使 堅田 玄宥

# ご讃題『お正信偈』分陀利華

Ref『お正信偈』

- 一切善悪凡夫人 (一切善悪の凡夫人)
- 聞信如来弘誓願 (如来の弘誓願を聞信すれば)
- 佛言廣大勝解者 (佛廣大勝解の者とのたまへり)
- 是人名分陀利華 (この人を分陀利華と名づく)
  - (Ref『お正信偈』第37～40句)

# ご讚題 念仏するもの-分陀利華

Ref 『仏説観無量寿經』註釈版聖典P117

- もし善男子・善女人、ただ仏名・二菩薩名を聞くだに、無量劫の生死の罪を除く。
- いかにいはいはんや憶念せんをや。
- もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。

# はじめに、さまざまの縁によって

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- はじめに
- リオのオリンピックの四年後の東京が決まり、震災復興支援ソング「花は咲く」が歌われるようになって、ブラジルと日本との間で心が何回も往復する架け橋が繋がりました。その日本から参りました。
- 昨日、アルバレス・マッシュード日本人墓地にお参りました当初入植された七百数十人余の日本人が眠っておられ、一歳前後の幼子が四百人を超えると伺いました。母親の悲しみはいかばかりであったでしょう。
  - ……エピソードをポルとゲースで紹介……
- さまざまの縁(えにし)によって
- 今から丁度十年前、2003年にブラジルで世界仏教婦人大会が開催されました。
- 十年という節目の年に、開教使としてお育て戴いておりますロンドリーナ本願寺主管との親子の縁で、お同行の皆様と共に阿弥陀如来様のご本願のお心を確認させて戴けることは大変有り難いことであります。
- 元開教使の先生から承っていた「数年の間には、是非現地をお訪ねになって下さい」とのお言葉により今回そのご縁が実りました。
- 「親は子により親になる。だから子と親とは同年齢だ」という言葉がありますが、開教使の親として私も又同年齢なのであります。
- 百年前からの日本人移民のご縁、仏教婦人会大会のご縁、親子の縁、さまざまのご縁に導かれるようにして寄せて戴けたのです。

# 浄土真宗のみ教えを頂戴するには

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 十年前の世界仏婦大会では、梯實圓和上様から、浄土真宗のみ教えは、お聖教によって頂戴できるけれども、幸いにも浄土真宗のみ教えは、阿弥陀如来様から本願力によって頂戴するみ教えですから、既にお念仏の信心を頂戴された方々(“妙好人”と申します)がどのように人生を歩まれたのかを伺うことによって、私達はみ教えに導かれることができますとお示し戴きました。
- そのような次第で、和上様は、“源左同行(本名足利 喜三郎)”お一人の逸話を丁寧にお話下さったのであります。
- そこで、今回は、初めにみ教えそのものをなるべく易しく、特に、私達の日常生活でお念仏がどんな風に働いて下さるか数年来の成果に基づいてご紹介し、後半は、仏婦大会ですから妙好人の中でもご婦人の妙好人の逸話をご紹介して参りましょう。
- 最後に、浄土真宗のお念仏のお心を歌い上げた「のんのさま」を一番、二番とご一緒に歌わせて戴きましょう。そしてもう一つ東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」をご一緒に歌って締めたいと存じます。
- 大事なところは南米開教区本部でポルトガル語に翻訳して戴いております。

# ご讚題「お正信偈の御文」、選択本願

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 資料のご讚題は、正信偈のお言葉です
- たった四行の中に、四者が表されています。其れは何でしょう。
- 苦しみ悩んでいる煩惱の凡夫(衆生、私たちのことです)と、阿弥陀如来とお釈迦様と、お救いに与った凡夫(真実信心の人)とが表されています。これは不思議なことです。
- 浄土真宗とは何か
- 凡夫が如来様のご本願の思し召しによりお救いに与っていきみ教えです。
- 四十八願の中から法然聖人が選択本願して下さった第十八願のみ教えです。
- 第十八願には「十方の衆生はたとえわずか十遍でもお念仏した者はお浄土に生まれる。もしも生まれることができなければ私は仏にならない」と誓われてあります。
- 法然聖人は、「お念仏は、ご本願に誓われた行だから、その功德を浄土往生のために謳わなくてもお念仏するだけでお浄土に生まれることができる」とおっしゃったのでした。

# 先手のお手立て、大行、信心、聞名

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 親鸞聖人は、その本質は、お念仏は、私達が気付くよりも先に、既に、阿弥陀如来のお手許で仕上げられた如来様の行をお与えになっいて下さる、それを如来様の思し召し通りに頂戴して称えさせて戴く“大行(だいぎょう)”だからだと明らかにして下さったのでした。
- 「如来様の思し召し通りに」とは、如来様からお与え下さったお念仏の称えぶりを示す姿であって、これを凡夫が取り得る“信心(の相)”だと初めて明らかにされたのでした。
- 如来様の思し召しにお任せしてお念仏すると直ちに聞こえて下さるものがあります。
- 南無阿弥陀仏と称えたのですから、南無阿弥陀仏と聞こえて下さったのです。
- 聞こえて下さる南無阿弥陀仏に聞き入る姿を“聞名(もんみょう)”と申します。
- その素晴らしさを私達に明らかにして下さったお方がお釈迦様であり、そのこと一つで煩惱具足の凡夫は、お救いに与ることができるのでした(Ref第十八願成就文)。

# 本願招喚の勅命

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 親鸞聖人は、称えるとき、聞こえて下さった南無阿弥陀仏は、阿弥陀如来直々のお喚び声(本願招喚の勅命)なのだと明らかにして下さいました(Ref六字釈)。
- なぜなら、称えたのは、当面、私のようにみえても、よくよく振り返ってみますというと、既に、如来様が仕上げてお与え下さり「さあ、称えてご覧」と促して下さったのですから、そのお心のままに称える行為は、実は、如来様が称えて下さった大行に他ならなかったからです。
- その結果、聞こえて下さった南無阿弥陀仏は、たった今し方お浄土を発してわが両の耳を揺るがせ、わが胸底に届いて下さった“本願招喚の勅命”(本願のお心からのお喚び声)に他ならなかったのであります。
- こうして、衆生の胸のうちに如来様のまことのお心が宿って下さいます。



# 信心、光明、名号

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 南無阿弥陀仏と称えせしめ、南無阿弥陀仏と聞かshめて、とうとうお宿り下さったのですから、お宿り下さったものこそは、南無阿弥陀仏のお名号(これを信心の体と申します)だったのでした。
- お宿り下さったお名号は、今度は、衆生の内側からお育て下さいます。
- その後、衆生は、日々お念仏を通して、お名号の働いて下さる深いお謂われ(仏願の生起本末)をとくとお聞かせに与り、いよいよ信心を新たにさせて戴くこととなりました。
- お名号は衆生を喚び覚まそうとなさる如来様の御働きそのものに他ありませんが、その智慧の働きは“光明”と称して、お日様のように衆生を外側から照らし続けてお導き下さいます。
- また、お名号は丁度お乳のように衆生の内側から暖めてお育て下さるのです。

# カトリックとの違いはお念仏にある

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- かつて、私がまだ若かりし頃、よくお話をお聞かせ戴いた西元宗助先生という篤信のお念仏の行者がいらっしゃいました。
- 先生は元はキリスト教者でいらっしゃいましたが、縁あって浄土真宗の念仏者となられたのでした。
- その先生に対して、元のキリスト教徒の皆様がこうおっしゃったと伺いました。
- 「実は、浄土真宗は大変羨ましく思います。
- なぜなら、浄土真宗には、お念仏があるからです。それに比べて同じく御法話を大切にしているキリスト教にはお念仏がありません。
- お念仏こそは、浄土真宗の長所であって私達キリスト教者が羨ましく思う一点です。」と。
- だから、私は、この機会に南米開教区のお同行の皆様にご訴えなければなりません。
- 「南無阿弥陀仏と称えるお念仏の日常生活」がどんなに素晴らしい誇り高き文化であるかと云うことを肝に銘じて戴きたいのです。
- お同行の皆様方がお念仏なされるとそのお姿は間違いなくお子達やお孫さん達をお育て下さるからです。

# お念仏するとは自分が問題になること

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 実は戦後、近年の日本でもお同行の間からお念仏の声が聞こえなくなってきました。
- これは一体どうしたことでしょう。
- お聴聞の御法座が少なくなった。家族が離れて暮らしお内仏様にぬかずく習慣が根付かない等々種々の原因が考えられますが、いずれにしても浄土真宗のみ教えが世の中に広がっていない証左になり、悲しいことです。
- 実は、日本国内でも御門主もこの事に大変危機感を感じていらっしゃいます。
- その原因の一つに教学やみ教えの説きぶりがハンドル操作の説きぶりに終わっていないかのご指摘になり、何よりもエンジンとなる説きぶりが大事だとおっしゃっています。
- み教えの説きぶりは、時代にあわせて、選び直し鍛え直すことが必要だとおっしゃっています。南無阿弥陀仏は、本願招喚の勅命(如来様のお喚び声)だと云うことをもっとしっかりお伝えしてくれとおっしゃっています。
- このお心を体して伝道施策を開発することが私自身の使命になったのであります。

# 乃至十念とは、観経流通分

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- さて、阿弥陀如来から賜る(これを他力と申します)の念仏は、仏説無量寿経(大経)の第十八願に「乃至十念」と誓われてあります。けれども、「乃至十念」が衆生の称える称名念仏によるのだというのは、大経だけでは明確ではありませんでした。
- お救いに与る私の真の姿を明らかにされた仏説観無量寿経により初めて明らかになるのであります。観経流通分にはご讃題の御文が掲げられています。
- もし善男子・善女人、ただ仏名・二菩薩名を聞くだに、無量劫の生死の罪を除く。いかにいはんや憶念せんをや。もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。
- ここには、三つの行いが示されます。
- ・ 聞名だけでも無量劫の生死の罪が除かれ、
- ・ 「いかにいはんや憶念せんをや」が続き、
- ・ 「もし、念仏するものは、分陀利華なり。」とあります。

# 自らがお救いのお目当てだとはつゆ知らない

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 大経だけならば、衆生がお救いに与る終のおてだてが“聞名”だったのに、ここでは対比の基準として示されているに過ぎません。
- 小生なりに、お尋ねしたところは、弊紙九月第二号「もし念仏するものは」に書き留めております。
- これについて、0和上にお尋ねしますと
- ・ 観経は、大経を意識していることが一点
- ・ 称名念仏するとは、初めて自分が問題になる姿だとお教え戴きました。
- 大変有り難いお導きでありました。
- 第十八願のお救いを衆生は一般的に受け止めがちであり、自らがお救いの目当てになっているとはつゆ知りません。
- お念仏ができないのは、衆生は自らが仏のお救いのお目当てだと頂戴できていないからに他ならないと。
- なるほど、さようでありました。

# 自分が問題となって初めてお念仏できる

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 先だった幼子を思い起こされるお方は「(如来様のお慈悲を) 教えてかえる子は知識なり」とお歌いになり、お念仏されることでしょう。
- 人生のご苦勞を共にされたご主人とお別れになったご婦人は「お誘い戴いたのだから仏教婦人会に行ってきたら」と背中を押してくれたご主人のお言葉を思い起こしてお念仏なさることでしょう。
- 悲しみ、淋しがり、初めて自らが問題になり、お念仏され、如来様の救いのお目当てであるとお気づきになることでしょう。
- 四苦八苦(一つが愛別離苦)の人生が自らの問題の背景となることは自然であります。
- そうして念仏する身にお育てに遇われたのですから、後に続く者の為に、他力念仏の先導者となって戴きたいことでもあります。

# 白道、得道の人

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 善導大師は、念仏者には、人生を浄土へと迎える白道と頂戴する幸いが恵まれていると明らかにして下さいました。
- 私達の前には、浄土へと続く本願念仏の大道があると知れば大きな安心が得られます。
- でもそれだけではなく、その道を確認に迎った先達がいらっしゃったとお知らせに与ってこそ、信心を頂戴したと云えるのでした。
- 妙好人の逸話をお聞かせに与ることは、まさに得道の人がいらっしゃったことをお知らせに与ることです。
- のみならず、私達も又、得道の人の生き様に習い、足跡を辿らせて戴きましょう。如来回向の無碍光如来の名を称する行い一つで、如来様のお喚び声に目覚めさせて戴く為に。
- それによって、煩惱具足のこの私が本願力の救いに遇わせて戴けるのです。
- 摂めとって決してお捨てにならない摂取不捨の利益に遇わせて頂けるのです。

# では、妙好人の跡をたどりましょう

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 源左さん
- 「わしがしんだらおやさまをたのめ」というのは、父が亡くなる時源左に残して行った言葉でありました。
- “親様とは何か”爾来、厳しいお聴聞の道行きが始まります。
- やがて、でんに刈り取った草束をまかせたとき「ふいっとわからせてもろうた」とおっしゃったのです。
- 私の業をすべて如来様が引き受けたとのお知らせに与られたのでありました。
- 才市さん
- 「才市よい」「へ。」
- 「今、念仏をとなえたわ、誰か。」
- 「へ、才市であります。」
- 「そうではあるま(い)」
- 「へ、弥陀の直説、なむあみだぶ」であります。



# 加賀の千代女さん、六連島のお軽さん

Ref) MYOKONIN O-KARU AND HER POEMS OF SHINJIN BY HOYU ISHIDA りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- 加賀の千代女さん
- 朝顔に つるべ取られて もらい水
- うつむいた ところがうてな すみれ草
- 六連島(むつれじま)のお軽さん
- きのう聞くのも 今日また聞くも ぜひにこいとのおよびこえ
- The voice heard yesterday and again today, is Amida calling  
Calling to promise, promising birth in his Pure Land (P42)
- 姿こそ 六つれで月日 くらせども やがてところは 花のみやこに
- なきあとに かるをたずぬる ひとあらば 弥陀の浄土に 行たとこたへよ。
- After I leave this world, if someone should ask for me,  
tell them I have gone to the pure land of my dear Amida Buddha (P33)
- 信を得し 人のよろこぶ 言の葉は かなにあらわす 経陀羅尼なり
- (最後の歌は、お軽さんの歌に接して随喜のあまり仙崖和尚が詠まれた歌であります)

# のんのさま

1. のんのんのんの のんのさま (凡例:○は一拍あけます)

このこのいのち まもりゃんせ

このこのあした まもりゃんせ

このこのみらい まもりゃんせ

2. のんのんのんの のんのさま

このこのともだち まもりゃんせ

このこの地球 まもりゃんせ

このこのゆめを ○まもりゃんせ

3. ななつのうみに はしかけて

せかいをつなごう てをつなご

はしははしでも にじのはし

せかいのこどもが あそぶはし

# 聲 名 (となえませ)

1. なもあみだぶつ なもあみだ (凡例: ○は一拍あけます)

なもあみだぶと となえませ

なもあみだぶと たたえませ

なもあみだぶと きかしゃんせ

2. なもあみだぶつ なもあみだ

なもあみだぶと はかりませ

なもあみだぶと たのまんせ

なもあみだぶと ○めざめませ

3. ななつのうみに はしかけて

せかいにつなごう みだのはし

はしははしでも ろくじばし

みだのじょうどに わたるはし

# “となえませ”のその訳

- なむあみだぶと称える行いは、如来様から聞名を確実ならしめる行いとして他力回向して下さった行業だと窺われます。口業は、讚嘆門の行業だったからです。
- 如来様から回向して下さったお名号をお称えする行為なのですから、およそほめ過ぎもせずほめ足りないこともなく、ぴったりと讚歎できることになります。
- かくしてなむあみだぶつと讚嘆すれば、間髪をいれず南無阿弥陀仏のお名号が聞こえて下さいます。
- 聞こえて下さったお名号こそは、たった今し方お浄土を発し、わが両の耳を揺るがせ、私の胸底に届いて下さった本願招喚の勅命そのものでありました。
- “はかる”とは、お名号をはかりの基準にして生きる事であります。これまで私の欲望を基準に生きて来たこの私が、この世は虚仮不実、如来様の仰せこそまこととお名号を生きる基準にさせて戴くことになるのです。
- タノムとは、お任せすること、如来様の仰せにお任せして生きることです。仰せにおまかせするとき、今生の夢の中にまどろんできた私も、漸くにして勅命に喚び覚まされるのでありました。
- 蓮如様の次のお歌(Ref註釈版初版p1185)はその一つの出拠と申しても良いかと窺われます。
- 弥陀の名をききうることのあるならば、南無阿弥陀仏とたのめみなひと(蓮如上人明応七年初夏仲旬)
- こうして、如来様の命がわが胸底に宿って下さったその日から、人生の道行がどんなに厳しかろうとも、如来様の智慧の光に導かれて、私は人生の白道を歩み始めることになるのでありました。
- その時既に私は如来様のお慈悲に包まれていることが判ります。摂取不捨の利益に与ったからです。
- “となえませ”のその訳、行巻の標拳として親鸞聖人が何故に「諸仏称名の願」と十七願を掲げて下さったのかのその訳は、聞名を確実ならしめる如来様のお手立てだったと頂戴できることであります。

# 花は咲く(一番)

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

## 1. まっしろな雪道に 春風香る

わたしは懐かしい あの街を思い出す

叶えたい夢もあった 変りたい自分もいた

いまはただ懐かしい あの人を思い出す

誰かの歌が-聞こえる 誰かが励ましてる

誰かの笑顔-が見える 悲しみの向う側に

花は花は花は咲く いつか生まれる君に

花は花は花は咲く 私は何を残しただろう

# 花は咲く(二番)

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

2.夜空の向こう-の 朝の気配に  
わたしは懐かしい あの日々を思い出す  
傷ついて傷つけて 報われず泣いたりして  
いまはただ愛おしいあのひとを思い出す  
誰かの思い-が見える 誰かと結ばれてる  
誰かの未来-がみえる 悲しみの向こう側に  
花は花は花は咲く いつか生まれる君に  
花は花は花は咲く 私は何を残しただろう

# 花は咲く

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

花は花は花は咲く いつか生まれる君に

花は花は花は咲く 私は何を残しただろう

花は花は花は咲く いつか生まれる君に

花は花は花は咲く いつか恋する君の為に

# 花は咲くの隠顕

Ref) りびんぐらいぶず平成25年9月第7号

- “わたしは何を残しただろう”は、震災を経た日本人が残した珠玉の言の葉だった。残すべき先は、“いつか生まれる君”である。
- まだ見ぬ君にバトンを渡そうとする今生唯今の私が居る。それがそうと顧みられるのは今からずっと先、まだ見ぬ君が今生に誕生して物思う君に育ったときである。そのとき既に私はこの世を去っているだろう。
- だから、正しくこれは現代人が残した三世に亘るお念仏(に準ずる言葉)である。
- いつか生まれる君にはいまひとつの意味が秘められている。
- それは、如来様から本願力回向されているみ教えを疑いなく頂戴した念仏者そのものを指す。
- 他力の念仏者は、やがてそのとき、如来様の本願力に乗じて極楽浄土に迎えとられる。
- お浄土には念仏者を迎える蓮の華が開いて迎えて下さる。
- こうしたいくつもの意味があって、“わたしは何を残しただろう”は、期せずして現代人が与えてくれたお念仏(に準ずる言葉)であると頂戴している。合掌。